

参考－5 平成23年度交通安全ファミリー作文コンクールの最優秀作

○小学生の部 最優秀作〈内閣総理大臣賞〉

愛媛県四国中央市立川之江小学校

2年 石川 さくら

かがみの力

わたしは、じてん車にのることが大好きです。じてん車にのる時には、オレンジ色のかがみをよく見るようにしています。こちらからはかべなどでみえないところでも、このかがみにうつって見る事ができるからです。これはカーブミラーとって、わたしたちがあんぜんをたしかめるときに手だすけをしてくれるものだとりょうしんが教えてくれました。

わたしは、カーブミラーのことを知り、ある二つのはっ見をしました。

一つ目は、わたしがお母さんと一しょにじてん車で図書かんに行った時のことです。わたしは、家から図書かんまでの間にカーブミラーがいくつあるのか数えてみることにしました。わかれ道やまがりかどなど、ぜんぶで十八こありました。いままで気がつかなかった場しょにもあり、おどろきました。

二つ目は、家ぞくで出かけた時のことです。わたしたちは、バスの一ばん前のせきにすわりました。すると、うんてん手さんのまわりにいろいろな大きさのかがみが十こもあることに気がつきました。うんてん手さんはこのたくさんのかがみで、おきゃくさんや外のようなすを見ているので、すごいなと思いました。

ある日、わたしは、こうさ点のカーブミラーに車がうつっていたので、とまっていた。すると、車もとまってくれました。わたしは、カーブミラーがわたしのことを車に教えてくれたんだなと思いました。そして、左右をかくにんし、おじぎをしてわたりました。カーブミラーにも心の中でありがとうと言いました。家にかえって、車の中や外を見ても、車にもかがみがあることにも気がつきまし

た。お父さんにきくと、うしろや外のようなすを見るためについているということを知りました。

わたしのお父さんは、こう通じこにあったことがあります。お父さんは車をとまっている時に、右からすごいスピードではしってきた車とぶつかりました。その人は、かがみをよく見ていなかったと言っていたそうです。お父さんは車にのっていたので、大げがはしなかったけれど、歩いているわたしがぶつかっていたらと思うと、とてもこわくなりました。

わたしは大人になったら、車をうんてんしてみたいと思っています。でも、その時は、車のかがみやカーブミラーをよく見て、じぶんの目できちんとあんぜんをかくにんするようにしたいです。そして、みんながあんぜんにくらせるように、心にゆとりをもって生活していきたいです。

○中学生の部 最優秀作〈内閣総理大臣賞〉

愛知県名古屋市立名塚中学校 2年 濱田 優花

母と私の合言葉

私「いってきます！」

母「自分の命は？」

私「自分で守る！」

母「いってらっしゃい！」

『自分の命は自分で守る』——これは、出掛ける前の、母と私の合言葉です。私がこの言葉に出会ったのは、七年前です。私を通った、静岡県浜松市立初生小学校では、児童は必ず、この言葉をクラス全員で宣言して下校します。当時の私は、この言葉に魅了され、登校前にも、母を相手に宣言してみました。すると、母は「深い言葉ね…とても大切な意味のある言葉だわ。優花とお母さんの合言葉にしよう！」と、この言葉をえらく気に入った様子でした。そして帰宅後、母とルールの確認をしました。

- ①信号は必ず守り、無理な横断はしない。
- ②青になったら、右・左を確認すること。
- ③周りの車の動きをよく見て、自分に気がついてい
るかを確認してから、横断すること。

母が告げた3つのルール。①と②は納得できたのですが、③は、母にはうなずいたものの、(自分が進む信号が青だったら、歩行者優先だし、そこまで確認しなくてもいいじゃん。)と、母の言葉を受け流してしまいました。

それから3ヶ月経った時のことです。母が交通事故にあってしまったのです。交通量の多い交差点。右折で待機中の母の車に、わき見運転の後続車が突っ込んだ、との事でした。急きょ、預けられた友人宅で、私は母が死んじゃうのではと、不安で一杯でした。しばらくして、母が治療を終え、迎えにきましたが、意外と元気そうな姿に、拍子抜けしました。「お母さんね、相手の車が向かってくるのが、バックミラーで見た時、とっさに『自分の命は自分で守る!』という優花の声が頭に響いてね。他の車を巻き込まないようにハンドルをしっかり握って、体を守ったの。だから、軽いケガで済んだのよ。合言葉のおかげね。」しみじみと言う母の言葉に、下校時に、青信号で渡ろうとしたら、左折車に巻き込まれそうになった自分の体験が蘇りました。交通ルールを守るのは当然ですが、守らない人があるのも現実です。また、皆が完璧に守っても、死角や想定外の出来事で、事故が起こる確率は^{ゼロ}0になることはないのです。自分の大切な命を守るためには、自分の目で安全を確かめる責任がある、ということが心にしっかりと根付きました。

母の事故以来、私は道路を横断する時、左右だけでなく、前後も確認しています。ドライバーが私に気づいていない時は、母との合言葉が私の心に響きます。慎重すぎる、と友人には笑われますが、一呼吸おいて渡るおかげで『ヒヤッと体験』が減りました。

友人との楽しい学校生活や家族の笑顔は自分の命があってこそ。頼りになるのは自分自身。私は今日もこれからも、合言葉を交わします。

『自分の命は自分で守る!』

○一般(高校生以上)の部

最優秀作〈内閣総理大臣賞〉

京都府京都市 福井 敦男

シートベルトは家族を守る愛の絆

助手席に妻が、後部座席に小学生の子どもたち二人が乗り込むと、さあ出発だ。私は、家族旅行に行くワンボックスカーを運転する。後部座席の子どもたちは、早くもお気に入りのアニメのDVDを観て、きゃっきゃと騒いでいる。

そのときだった。転がるボールを追いかけて、小さな子どもが道路に飛び出した。私は、とっさに急ブレーキを踏む。間一髪、飛び出した子どもは避けることが出来たが、後部座席に乗っていた子どもたちは、二人とも大きく前につんのめって、運転席横のダッシュボード付近まで身体を投げ出してきた。

「ちゃんと座ってろ!」思わず声を荒げて怒ってしまった。子どもたちは、しゅんとした。その頃は、まだ、後部座席のシートベルト着用は義務付けられてはいなかった。

旅行から帰り、怒っているだけでは駄目だと気づいた私は、後部座席でもシートベルトを締める必要性を説いた。子どもたちに車の雑誌を見せた。そこには、人形を使った事故の実験写真がコマ送りで載せてあり、シートベルトをしていなかった後部座席の人形は、事故の瞬間、頭からフロントガラスを突き破り、大きく車外に投げ出されていた。手足が変な方向に折れ曲がり、無残な姿を晒している。「うわあ、こわい。こわい」と、小さな弟の方が声を上げた。食い入るように写真を見つめている。「あのときは、急ブレーキを踏んで悪かったな」と、私が旅行のときのことを謝ると「ううん」と、兄の方が答えた。

それから間もなく、週末に家族でいつものスーパーへ行くとき、後部座席に乗り込んだ兄の方が、私が何かを言う前に、シートベルトを締め始めた。下の小さな弟の方も「どうやるの、こう?」と、兄に聞いている。カチャッと音が聞こえた。

その後、後部座席でもシートベルト着用が法律で義務付けられた。今では、家族で車に乗り込むと、後部座席から「カチャッ、カチャッ」と心地よい音が、当たり前のように聞こえてくる。この音で、運転する私もなぜか安心できるのである。

シートベルトは家族の命を守る命綱、言わば愛の絆である。幅は僅か10センチにも満たないが、効果は絶大だ。見た目以上に太い絆なのである。

この先、自分が事故を起こすこともあるかも知れない。大きな事故に巻き込まれることもあるかも知

れない。でもそんなとき、シートベルトを着用しておれば、命の危険は大きく軽減されるだろう。乗車する家族全員がシートベルトを着用することで、家族一人ひとりが、シートベルトという愛の絆で繋がっているように感じる。家族はシートベルトという愛の絆でしっかりと結ばれているのだ。だから私は、家族のために安全運転を心がける。絶対に事故は起こすまい、と。

私は、家族全員のシートベルト着用を確認すると車を出した。さあ、出発だ！